

Neg を c-統御する不定語 + モ

片岡喜代子
(日本大学非常勤)

キーワード：否定極性，否定調和，wh-mo，Neg，c-統御

1. 導入*

日本語には「だれも／なにも」のように、「不定語 + モ」の形で否定環境にのみ生起する不定表現がある。

- (1) a. 昨日は，(学生が) だれも 来なかった。
b. *昨日は，(学生が) だれも 来た。
- (2) a. 花子は(野菜を) なにも 食べない。
b. *花子は (野菜を) なにも 食べる。

「モ」を伴った不定表現はこれらの他にもあるが¹⁾，本稿では，(1)，(2) のよう

* 本稿は，第132回日本言語学会大会(2006年6月17・18日於東京大学駒場キャンパス)での発表内容に基づく。完成に至るまで多くの方々から貴重な助言を得た。この場をお借りして御礼を申し上げる。発表での参加者の皆様，『言語研究』編集委員会及び査読の先生方，そして本研究について長年にわたり議論し示唆に富む助言をくださった南カリフォルニア大学傍士元先生，京都大学田窪行則先生，九州大学上山あゆみ先生に感謝する。傍士先生には最終段階まで公刊に際しての助言をいただいた。最後に，群馬県立女子大学深谷晃彦氏，南カリフォルニア大学の向井絵美氏と入江真紀氏にも支援を感謝する。論文における不備はすべて勿論筆者の責任である。

1) 例えば，次のような表現がある。これらは，不定表現そのものが格助詞を伴い項名詞句として働き，また肯定環境でも生起可能で，(1)，(2)の「だれも／なにも」とは異なる。

- (i) a. だれもがその知らせを聞いて驚いた。
b. だれがその知らせを聞いても，驚いた。
- (ii) a. 太郎は，なにもかも(を)捨ててしまった。
b. 太郎は，なにを買っても，すぐ捨ててしまう。
- (iii) a. これさえあれば，どこにも行ける。
b. これさえあれば，どこに行っても安心だ。

「モ」と不定表現の組み合わせという点において，Kuroda(1965: Chapter III)で提示されたような統一的な分析の可能性は考えられるが，それについては今後の課題としたい。

な、名詞句に「だれも／なにも」がいわば遊離数量詞のような形で付随している形式だけを取り扱う。それらが統語的・意味的にどのような働きを担い、どのような要素として扱われるべきかについて論じる。以下でまず、従来の研究においてそれらがどのように扱われてきたかを概観しておく。

1.1. 否定極性項目としての不定語+モ

「だれも／なにも」は、英語で否定環境にのみ生起する any- と同様、全称否定解釈を与えることから、any- の対応物と一般に見なされてきた (太田 (1980), Kato (1985) 等を参照)。

- (3) a. Mary did not say **anything**.
 b. *Mary said **anything**.

否定環境にのみ生起し全称否定解釈を導くという事実から、any- は否定極性項目 (negative polarity item, 以下 NPI と表す) として扱われ、また以下のように主語・非主語非対称性を示すといった事実等から、Klima (1964) 以来、否定要素による c- 統御がその統語的必要条件と仮定されている。

- (4) a. Mary did not [invite **anyone**.]
 b. ***Anyone** did not [invite Mary.]

日本語において否定環境にのみ生起する不定語+モも、any- と同様 NPI として扱われ、Kato (1994, 2002) などを初めとする多くの研究において、否定要素による c- 統御がその派生における必要条件であると仮定されてきている。

1.2. 否定調和項目としての不定語+モ

イタリア語 (5) やスペイン語 (6) 等でも、否定環境にのみ生起可能で、全称否定解釈を導く nessuno や nadie 等の不定表現がある。

- (5) a. **Nessuno** è venuto. 'Nobody came.'
 b. Non è venuto **nessuno**. /*È venuto **nessuno**. 'Nobody came.'

(Zanuttini 1991: 258a, 259a)

- (6) a. **Nadie** vino. ‘Nobody came.’
 b. No vino **nadie**./*Vino **nadie**. ‘Nobody came.’

(Zagona 2002: 4, (61a, b))

これらは、動詞の前に生じた場合は英語の no- と同様の働きをするが、動詞の後に生起すると英語の any- と同様の働きを見せ、文否定要素（それぞれ non と no）を要求する。

- (7) a. **Nobody** came.
 b. I did not see **anybody**./*I saw **anybody**.

文否定要素（以下 Neg で表す）を必要とする不定表現であるという点においては、(1), (2) に示した日本語の「だれも／なにも」と共通してはいるが、動詞の前に生じた場合は単独で文否定を導くという点においては、「だれも／なにも」と異なっている。(1b), (2b) に見られるように、「だれも／なにも」ほどの位置でも Neg を要求するからである。

このロマンス諸語における現象は、否定に関わる要素だけが常に特別な形をとることから、否定調和 (negative concord) と呼ばれ、これらの不定表現は否定調和項目 (negative concord item, 以下 NCI と表す) と呼ばれてきた。ある要素が否定に関わる場合にだけ常に特別な形をとるという点においては、このロマンス諸語の現象も、英語の不定表現が否定環境でのみ any- という形態をとる現象と同じであると言える。そのような理由から、生成文法理論による初期の研究では、Klima (1964) の any- の分析に沿った捉え方もなされてきた (Bosque (1980: 2.3)). しかしながら、最近では、この否定調和と呼ばれる現象は、幾つかの要素が否定素性 (Neg-feature) という共通の素性により関係付けられる現象であると捉えられ、素性照合 (feature checking) のメカニズムの一端を担うものとしての説明が試みられている。特に、NCI が単独で文否定を導くことに着目して、文否定を導きうる否定素性が一文中に複数共起していながら単独否定が導かれる現象として捉えられている。そのような考え方の下、Zanuttini や Haegeman らによる一連の研究では (Zanuttini (1991), Haegeman (1995),

Haegeman & Zanuttini (1996) 等), NCI を含む文の派生には, 否定素性の照合を経て, 一つの否定力 (negative force) を残して他をすべて取り消す操作が関わるという分析が提示されている. ただし, 複数ある否定力のうちの否定力が消去されるかは特定されていなかった.

ところが最近, Watanabe (2004) において, 日本語の「だれも／なにも」がイタリア語の *nessuno* 等と同タイプの NCI であるという分析の下, 「だれも／なにも」が関わる省略表現のデータに基づいて, Neg と NCI のように複数の否定力が重なった文の派生で消去されるのは Neg の否定力であって, NCI そのものは LF においても最終的に否定力を持ち続けるという提案がなされた. つまり Watanabe (2004) は, 「だれも／なにも」は Neg による c-統御を必要とする NPI ではなく, それ自体が文否定力を持つと主張している²⁾.

1.3. 目的

本研究では, まず, 日本語でやはり否定環境にのみ生起する表現の一つ, 「シカ」句 (以下 XP-sika で表す) と「だれも／なにも」の相互作用を見る. そして, それらの現象が, 「だれも／なにも」を, NPI として Neg による c-統御がその LF 派生での条件の鍵とする Kato (2002) などの分析によっても, Watanabe (2004) のように LF で否定力を持つ NCI とする分析によっても, 説明できないことを示す. それに加えて, Watanabe (2004) で提示されている省略表現についての分析が間違っただけの予測を生むことを見て, そのデータに基づく議論が Watanabe (2004) 分析を支持する根拠にはならないことを示し, それに基づいても Watanabe (2004) の NCI としての分析が適切ではないことを再度示す.

その上で, 「だれも／なにも」と XP-sika が共起した場合の相互作用を説明するためには, 「だれも／なにも」は全称量化を導く要素と見なすべきであることを示す. 「だれも／なにも」は格標示された項名詞句と共起可能であるので, 本研究では「だれも／なにも」を含む句全体を項名詞句として扱い wh-mo と表す (Kawashima & Kitahara (1992), Kato (2002) 等を参照のこと). wh-mo と

2) 「だれも／なにも」のこの分析に基づいて, Watanabe (2004) では, 様々な言語の焦点形態素の分布や統語的振る舞いの違いを通言語的に説明することが試みられている.

XP-sika の相互作用に基づいて、wh-mo が全称量化力を持つと分析すべきであること、また、それ故に全称否定解釈を導くためには LF において Neg を c-統御しなければならないことを主張する³⁾。

2. XP-sika と不定語+モ

2.1. 同節内における XP-sika と「だれも／なにも」

まず、同節内に XP-sika と「だれも」が共起した文を見てみよう。(8b) のように、XP-sika が目的語で「だれも」が主語である文は容認可能であるが、(8a) のように XP-sika が主語で「だれも」が目的語として現れると容認不可能になることが観察される⁴⁾。

- (8) a. *花子しか だれも 推薦しない.
 b. だれも 花子しか 推薦しない.

(8b) は、(9) に示すような解釈が成立可能で、容認可能な文である。

-
- 3) 韓国語で否定を伴う不定表現については、Chung and Park (1998), Sells (2001a, b, 2006) 等が論じ、それらが否定の作用域に存在しないと主張する。Sells (2006) は、NPI の統語的認可と意味的認可を区別し、前者の必要条件としては NPI が [NEG+] の節内に存在することのみで、意味解釈レベルでは NPI が否定の作用域には存在しないと主張する。本稿で論じる現象と韓国語の現象を、その分析及び文否定の個別の特徴とも併せて比較検討することは、今後の課題の一つとして興味深い。
- 4) wh 要素や Neg, NPI, その他演算子となる量化表現の相互作用は一般には intervention effects と呼ばれ、多くの研究がなされている (Takahashi (1990), Aoyagi & Ishii (1994), Sohn (1995), Sells (2001a), (2006), Kuno & Whitman (2004), Tomioka (to appear) 等)。以下で論じる現象もその一つと捉えるかもしれないが、本稿での現象は、上記研究で intervention effects として扱われた現象と同一視すべきではない。Tomioka (to appear) が説得的に論じたように、上記研究で intervention effects と呼ばれた現象は純粋に LF にだけ言及する統語論では説明され得るものではないが、本稿の現象はすべて LF 統語論において解決されるからである。ただし、否定関連の現象がすべて LF 統語論において解決されうると主張するのではない。註 6 でも述べるが、本稿では LF に基づかない可能性のある現象を排除して LF に基づくと判断される現象だけに限って議論している。

また、本稿で論じる、いわゆる NPI 同士の相互作用については、Kuno & Whitman (2004) は線の順序と NPI のスケールにおける強弱により説明し、Sells (2006) は作用域は表層上の語順で決まるという仮定の下、NPI が統語的には [NEG+] の節にあるが意味的には否定の作用域外にあるとする条件で説明する。両分析ともに主に韓国語の現象に基づくが、本研究のように LF での統語的条件だけでは説明していない。両分析を検討し本研究で提示する分析と比較することは本稿では行わないが、4.3 節で論じるように、日本語かき混ぜ文では作用域関係が多義的である事実を考慮すると、表層上の順序関係だけに言及する分析では事実を捉えきれないと考えられる。

- (9) すべての人それぞれについて、「花子を推薦し且つ花子以外のすべての人については推薦しないこと」が成り立つ。

次に(8a)である。XP-sikaと「だれも」がそれぞれ単独で現れた場合、その文の解釈は、(10a)と(10b)のように表すことができる。従って、(8a)もそれらが組み合わさって解釈されてもいいはずである。

- (10) a. A-sika ... -nai:
Aは…であり、且つA以外のすべてについて「…でない」ことが成り立つ。
- b. dare-mo ... -nai:
すべての人それぞれについて「…でない」ことが成り立つ⁵⁾。

具体的に(8a)で考えてみると、(11)、(12)に基づいて、(13b)のように解釈されてもいいはずである。(11)の「太郎を」を「だれも」に替えた文が(8a)と見なすことができる。

- (11) a. 花子しか 太郎を 推薦しない (こと).
b. (11a)の解釈:花子が太郎を推薦し、且つ、花子以外の人すべてについて「太郎を推薦しないこと」が成り立つ。
- (12) a. 花子が だれも 推薦しない (こと).
b. (12a)の解釈:すべての人それぞれについて、「花子その人を推薦しないこと」が成り立つ。
- (13) a. *花子しか だれも 推薦しない. (= (8a))
b. (8a)に論理的に可能と考えられうる解釈

5) 問題にしている全称否定解釈は、「…である人はいない」と示すこともできる。以下では主に(10b)の記述を採るが、いずれを採るかは後の議論に影響しない。ただ、示しているのは文の解釈であって、意味表示の分析を提示するものではない。また、解釈は本来演算子間の作用域関係が明白な論理式で示すべきであり、当初は論理式による記述も試みた。しかしそれにはXP-sika等演算子となる要素に正確な語彙の意味を与える必要があるが、それはこの論文の目的をはるかに超えるものであり、筆者の未熟な知識では演算子を複数含む複雑な文に正確な論理式を与えるのは困難であった。簡略化した論理式では意図が正確に伝わらず誤解を招くという査読の先生からの指摘を受けて、本稿では読み下した形で記述している。

- (i) 花子がすべての人を推薦し、且つ、花子以外のすべての人は「すべての人についてその人を推薦しないこと」が、成り立つ。
- (ii) 花子が推薦する人がいて、且つ、花子以外のすべての人は「その人を推薦する、そのような人がいない」ことが、成り立つ。

しかしながら (8a) は、(13b-i, ii) のいずれの解釈も成立不可能である。たとえ解釈できたとしても (14) のような解釈のみ成立可能で、「だれも」を量化表現として適切に解釈することが不可能であると観察される。(8) の観察については後の (48), (49) も参照されたい。

- (14) 花子が人を推薦し、且つ、花子以外は、人を推薦するということがない。

さて、日本語の非かき混ぜ文では、主語が目的語を c-統御する構造関係（以下「主語 >> 目的語」で表す）だけが可能とされる (Hoji 1985, 2003)。本研究では、XP-sika も「だれも／なにも」も他の作用域を取る量化表現 (QP) と同様 LF で量子繰り上げ (QR) を受けると仮定する (May 1985)。ただし、一般に受け入れられているように、QR 等の LF 移動に関して、日本語では作用域関係不変の原則 (Scope Rigidity Principle (Huang 1982, Hoji 1985), 以下 SRP で表す) が働いているとする。

- (15) 作用域関係不変の原則 (SRP) : 最大投射 XP_1 と XP_2 の c-統御関係はいかなる LF 移動によっても変わらない。

また、Reinhart (1983) 以来一般に受け入れられているように、ある要素 α の作用域は LF におけるその c-統御領域であるとする。そうすると、作用域を取る QP 同士の作用域関係そのものがそれらの LF での c-統御関係を示していることになり、(15) の SRP が働いているということは、それらの LF での c-統御関係は LF での QR 移動前の関係と同じであるということになる。つまり、それら QP 同士の作用域関係が LF 移動前の構造関係を反映するものと見なせるのである。

例えば、非かき混ぜ文で QP を二つ含む文における作用域解釈は (16) のようになる。(以下では、QP1 が QP2 に対して大きい作用域を取る分配解釈 (wide

scope distributive reading) を $QP1 > QP2$ と示す。)

(16) [三人以上の学生]_{QP1} が [五冊以上の本]_{QP2} を 読んだなら, …

(i) ^{ok} $QP1 > QP2$:

「読んだ本が五冊以上ある, そのような学生が三人以上いる」という解釈.

(ii) $*QP2 > QP1$:

「読んだ学生が三人以上いる, そのような本が五冊以上ある」という解釈.

この場合, 上に記したように, 主語 $QP1$ が目的語 $QP2$ に対して大きい作用域を取る解釈は可能であるが, 目的語 $QP2$ が主語 $QP1$ に対して大きい作用域を取る解釈は成立不可能である⁶⁾. 非かき混ぜ文における主語と目的語の c-統御関係は主語 $>>$ 目的語の一種類だけ可能であるとされるが, この事実は SRP が働いているとすると当然予測される事実であり, その構造関係を反映していると言える. 更に, 付け加えておくと, Hayashishita (2004) では, (15) の SRP は量化表現のみならず, 指示表現や「ダケ」のような焦点接辞を含む名詞句等にも適用されることが論じられている (Hayashishita (2004: 4)). ただし, この SRP は最大投射間にも適用される原則であって, 後の節で見る Neg と QP との作用域関係には適用されない. 「最大投射間にも適用される」というこの SRP の特質については, 田中 (2004) が「サエ」の作用域を用いて独自の議論を提示している.

以上のような仮定をふまえると, XP-sika と「だれも」が同節内に共起している (8a), (8b) の場合, 両者の LF での構造関係は以下のように表されることになる.

6) (16) の目的語「五冊以上の本」は, 特定の本を指す解釈が可能である限りにおいて, 主語 QP より大きい作用域を取ることが可能である. Hayashishita (2004: 2.2, 3.5) は, ある QP が特定集団解釈が可能である限りにおいて構造関係に基づかずその作用域を決め得ることを示し, またそれに付随する現象 (freezing effects on scope, *ibid.* 2.2.2) を確認して, 構造に基づく作用域解釈と基づかない解釈の識別を可能にしている. 本研究では, 特定集団解釈が困難な QP を用いたり同じくそれが困難とされる条件節に埋め込んで, 構造に基づかない解釈の可能性をできる限り排除して現象観察を行った. ただし, (16) を除いてはスペース等の関係から条件節に埋め込んでいない.

- (17) a. (8a) の構造関係 : [XP-sika₁ [dare-mo₂ [t₁ [t₂ V-nai → *
 b. (8b) の構造関係 : [dare-mo₁ [XP-sika₂ [t₁ [t₂ V-nai → ok

つまり、上で見た事実は、それが LF 構造における違いを反映しているとするなら、LF で「だれも」が XP-sika を c- 統御する構造関係（「だれも」>>XP-sika）は可能だが、XP-sika が「だれも」を c- 統御する構造関係（XP-sika>>「だれも」）は不可能であることを示している。ところが、以下に見るように、この観察は、「だれも」を NPI とする分析でも、NCI とする分析でも説明不可能である。まず次の節で、XP-sika がどのような統語的条件に従っているのかを確認しておこう。

2.2. XP-sika の条件

日本語では、Kuno (1980) や今仁 (1993) で指摘されてきたように、Neg と QP との作用域関係は多義的であると観察される。(18) で確認されるように、主語名詞句も非主語名詞句も Neg の作用域に入る解釈が可能である。

- (18) a. 山田先生が M 社に [三人以上の学生]_{QP1} を紹介しない (こと)
^{ok} QP1>Neg, ^{ok} Neg>QP1
 b. [三人以上の先生]_{QP2} が M 社に 太郎を 紹介しない (こと)
^{ok} QP2>Neg, ^{ok} Neg>QP2

QP>Neg, Neg>QP の解釈はそれぞれ、例えば (18a) で表すと、(19a, b) の解釈のことである。

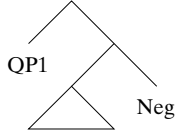
- (19) a. QP1>Neg : 紹介しない学生を問題にする解釈。
 「山田先生が M 社に紹介しない学生」の数が三人以上である。
 b. Neg>QP1 : 紹介する学生を問題にする解釈。
 「山田先生が M 社に紹介する学生」の数が三人以上でない。

α の作用域は LF におけるその c- 統御領域であるので、上の事実に基づけば、どのような派生を取るにしても、QP を含む否定文には、QP が Neg を c- 統御する LF 表示と Neg が QP を c- 統御する LF 表示の二つが可能であると仮定せざるを

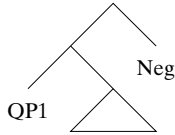
得ない。前節でも述べたが、Neg には (15) の SRP は適用されないので、この事実は SRP と矛盾するものではない。

(20) ... *QPI* ... *Neg* の文の LF

a. LF1: \rightarrow ^{ok} *QPI* > *Neg*



b. LF2: \rightarrow ^{ok} *Neg* > *QPI*



ところが *QP* を含む否定文に *XP-sika* を組み込むと、*QR* 前の位置で *XP-sika* >> *QP* である *QP* は *Neg* より大きい作用域を取れないことが観察される。つまり、その場合は (20a) の LF1 が不可能になると言える。一方、*QR* 前の位置で *QP* >> *XP-sika* である *QP* は *Neg* の作用域に入ることが不可能と観察され、その場合は、(20b) の LF2 が不可能になっていると言える。以下に具体例をあげて、それぞれ、成立／不成立としている解釈を表す。

(21) (Cf. (18))

a. 山田先生しか M 社に [三人以上の学生]_{OP1} を紹介しない (こと)

XP-sika >> *QPI* \rightarrow **QPI* > *Neg*, ^{ok} *Neg* > *QPI*

b. [三人以上の先生]_{OP2} が M 社にしか 太郎を 紹介しない (こと)

QP2 >> *XP-sika* \rightarrow ^{ok} *QP2* > *Neg*, **Neg* > *QP2*

(22) (21a) の解釈

a. ^{ok} *Neg* > [三人以上の学生]_{OP1}

山田先生が M 社に紹介する学生の数が三人以上で、且つ、山田先生以外が M 社に紹介する学生の数が三人以上でない。

b. * $[$ 三人以上の学生 J_{QP1} $>$ Neg

- (i) 山田先生がM社に紹介する学生の数が三人以上で、且つ、山田先生以外については、M社に紹介しない学生の数が三人以上である。
- (ii) 三人以上の学生について、それぞれ、「山田先生だけがその学生をM社に紹介し、山田先生以外はM社に紹介しない」ことが成り立つ。

(23) (21b) の解釈

a. * $[$ 三人以上の先生 J_{QP2} $>$ Neg

「M社に太郎を紹介して、且つ、M社以外には太郎を紹介しない」先生が三人以上いる。

b. *Neg $>[$ 三人以上の先生 J_{QP2}

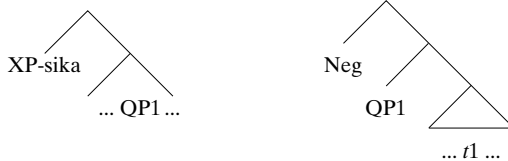
「M社に太郎を紹介して、且つ、M社以外には太郎を紹介しない」先生が三人以上でない。

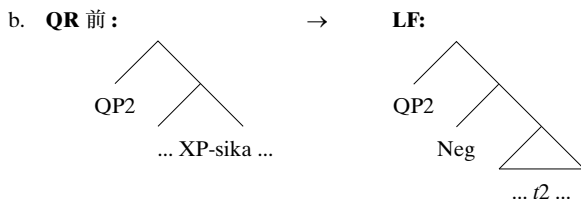
(21a) のように QR 前の関係が XP-sika $>>$ QP である QP は Neg より大きい作用域を取れない。それはつまり、その QP は LF で Neg を c-統御できないということを示している。一方、(21b) のように QR 前の関係が QP $>>$ XP-sika である QP は Neg の作用域に入れない。それは、その QP は LF で Neg に c-統御され得ないことを示している。従って、QP 一つを含む否定文では (20) に示したように QP と Neg の構造関係が二種類可能であったが、XP-sika と QP が共起した否定文では、(24) に示すように QR 前の両者の位置関係に応じて、一種類ずつだけ QP と Neg の構造関係が可能ということになる。(ただし、註6で述べたように、(21a) において、もし目的語 QP 「三人以上の学生」を特定集団に解釈することが可能であれば、その限りにおいて (22b-ii) の解釈も可能である人もいることを付け加えておく。(21) の観察の詳細については、片岡 (2006: 5.2) を参照されたい。)

(24) a. QR 前:

→

LF:





SRP が働いているので XP-sika と QP の c-統御関係は LF 移動後も変わることはない。従って、これは、いわば XP-sika が LF で Neg の c-統御領域を決定する役割を担うと捉えられる。Neg は LF で VP の姉妹位置にあると仮定すると (Pollock 1989), Neg と XP-sika は主要部・指定部の関係と同じ位置関係にあるという結論に至る。LF で Neg に限りなく近く、且つその c-統御領域を示すことが可能である位置は他にはないからである (これについての議論の詳細は片岡 (2004a: 5, 2004b, 2006: 5), Kataoka (2006) を参照されたい)。

(25) a. QR 前: [XP-sika [QP1 ...
→ LF: [_{NegP} XP-sika_i [_{Neg'} [_{VP} QP1 [_{VP} t_i [_{V'} t₁]]] Neg]]]

b. QR 前: [QP2 [XP-sika ...
→ LF: [QP2 [_{NegP} XP-sika_i [_{Neg'} [_{VP} t₂ [_{V'} t_i]]] Neg]]]

(26) XP-sika は LF において Neg と主要部・指定部の位置関係と同じ関係になければならない。

仮に (26) が働いていないとすると、(25a) の QP1 は LF において Neg の c-統御領域外にあることも可能になり、QP1 > Neg の解釈も可能であることを期待させる。しかし事実としては上で見たように、この場合 QP1 > Neg は不可能であるので、それを可能にする LF 表示を排除するために、(26) は必要であると言える。

まとめて述べると、(26) の条件と SRP とを併せると、そこから (27a) と (28a) が得られる。それぞれから (21) が正しく予測され、説明が与えられる。

(27) a. QR 前の関係が XP-sika >> QP である QP は LF で Neg を c-統御できない。

- b. 予測 1 : QR 前の関係が XP-sika>>QP である QP は Neg より大きい作用域を取れない。
- (28) a. QR 前の関係が QP>>XP-sika である QP は LF で Neg に c- 統御され得ない。
- b. 予測 2 : QR 前の関係が QP>>XP-sika である QP は Neg の作用域に入れない。

さて、「だれも／なにも」が従来扱われてきたように、NPI であるという分析の下、(29) のような Neg による c- 統御が LF における必要条件であると仮定してみよう。

- (29) 「だれも／なにも」は Neg に c- 統御されなければならない。

そうすると、「だれも／なにも」は QR 前の位置において XP-sika に c- 統御される位置には生起できても、XP-sika を c- 統御する位置には生起できないはずである。ところが (8a, b) で見たように事実はその逆である。Kato (2002) が主張しているように、Neg による c- 統御が LF 派生過程における条件であるとしても、(8a, b) の違いを説明できない。Neg が VP (もしくは IP) 付加位置にある以上、いずれの場合も QR 前の位置において (29) が満たされるからである。従って、XP-sika の条件 (26) か SRP を見直さない限り、(29) の条件は維持できないことになる。SRP については、「だれも／なにも」がその原則に従っていることが (30) で確認できる。

- (30) だれも 三冊以上の本を 読まなかった。
- (i) *だれも > 三冊以上の本 :
- a. 読んだ本が三冊以上でない人がすべてである。
- b. 読んでいない本が三冊以上である人がすべてである。
- (ii) *三冊以上の本 > だれも :
- 読んだ人がいない本が三冊以上である。

次に、Watanabe の主張の通り「だれも／なにも」が LF で Neg と同じ文否定

力を持ち実質的には Neg の役割を担う⁷⁾と仮定してみよう。(26)の条件に従えば、XP-sika は定義上 LF で Neg に c-統御されてはならず、逆に Neg を c-統御し限りなく Neg に近い位置になければならない。これらの仮定によれば、やはり、LF での関係が XP-sika>>「だれも／なにも」は可能だが、「だれも／なにも」>>XP-sika は不可能という結果になり、QR 前の位置関係で XP-sika>>「だれも／なにも」である文は可能であることが期待されるが、「だれも／なにも」>>XP-sika である文は不可能と予測されることとなる。しかしながら、やはり事実とは異なり、QR 前の位置関係が XP-sika>>「だれも／なにも」は不可能で、「だれも／なにも」>>XP-sika だけが可能である。Watanabe が提案するように、「だれも／なにも」が LF で Neg と同じ文否定力を持つという分析でも、説明できないのである。

では、(8a, b) で示した XP-sika と「だれも／なにも」の相互作用を説明するためには、「だれも／なにも」をどのように分析すべきであろうか。以下では、「だれも／なにも」は、全称量化を導く要素であり、それ故に全称否定を導くためにはそれを含む名詞句が LF で Neg を c-統御しなければならないことを主張する。その議論の前に、Watanabe (2004) がその主張の根拠とする省略返答文の分析を紹介してその問題点を指摘し、提示されている経験的議論が Watanabe (2004) の主張の根拠にはならないことを示しておく。

3. Watanabe (2004) の議論と問題点

3.1. Watanabe (2004) の省略返答文の分析

Watanabe (2004) が提示する仮説は (31) である⁸⁾。

7) 註9でも説明するが、Watanabe (2004) は、NCI はその焦点素性 (EPP 素性) ゆえに最終的には NegP と併合 (Merge) し、その過程で Neg そのものの否定素性は取り消され、NCI のみが否定力を持つとする。NegP と併合した NCI が Neg の代わりに Neg と同じ否定力を持つということは、実質的には、NegP が Neg の作用域ということと同じになる。

8) Watanabe (2004) は、Watanabe (2002) を更に発展させた内容であると言える。その主張はほぼ同じであるが、Watanabe (2004) においてその主張を裏付ける決定的な議論として省略表現の理論的分析がより詳細になされ、また、それに基づき、焦点形態素の分析もより発展している。そのような背景から以下では Watanabe (2004) を取り上げて、その主張と分析への反論の議論を行う。

- (31) Watanabe 仮説 : NCI を持つ言語の派生において、否定力が消去されるのは、NCI の否定力ではなく Neg の否定力である。

その主な根拠は、日本語で (32) のような省略返答表現「なにも」が、「なにも見なかった」という全称否定解釈でのみ可能であるという事実である。

- (32) Q: なにを見たの? A: なにも. (= なにも見なかった.)

Watanabe (2004) はこの事実を以下のように説明する。まず, Merchant (2001) に従い, 省略は PF における消去であり, その表現の LF は完全な形で表示されていなければならないとした上で, その PF における消去が可能であるためには先行表現 (antecedent) となる言語表現が必要で, その先行表現と省略部分が意味的に等価 (semantically equivalent) でなければならないとする。つまり, (34) のような意味同一性条件 (semantic identity condition) が守られなければならないと仮定する。(Watanabe 2004: 1, 3.2)

- (33) Q: なにを見たの? A: なにも [-見なかった]. (Watanabe 2004: (31))

- (34) 省略における意味同一性条件:

省略が可能であるためには, 省略部分とその先行表現が意味的に等価でなければならない。

この条件に従えば, (32) で, その疑問文に対して省略返答表現が可能であるためには, 省略部分の「見なかった」が, この場合の唯一の先行表現である「見た」と意味的に等価でなければならない。そうでなければ, 返答文における「見なかった」が PF において消去され得ないからである。従って, 返答文で省略されている「見なかった」は意味解釈が反映されるべき LF において否定力を保持していることは不可能であり, LF での派生過程を経て Neg の否定力は消去され, 「なにも」そのものが否定力を保持していると考えざるを得ない⁹⁾。

9) Watanabe (2004) は「モ」ゆえに「なにも/だれも」が持つ焦点素性 (focus feature) が引き金で, Neg の EPP 素性と的一致 (Agree) のための移動 (Move) に付随 (pied-piping) して否定素性の照合が行われると主張する。その過程ゆえに, (32A) のような省略表現も LF 派生では初めに Neg が存在することが重要となる。その「な

更に Watanabe は、この議論を裏付けるために、(35) の例を出している。

(35) Q: なにを見たの? A: へび. (Watanabe 2004: (19))

先行表現が肯定述部であっても否定述部が省略可能であるならば、この省略返答表現が「へびを見なかった」の解釈でも使用可能になるはずである。しかしながら、それは不可能であるので、先行表現と省略部分の間には意味的同一性が必要で、その結果、先行表現が肯定述部である場合に省略可能になりうるのは肯定述部だけであると主張する¹⁰⁾。

このようにして、Watanabe (2004) は、「だれも／なにも」は NCI であるとした上で、NCI を含む文においては、LF での否定素性消去の過程において消去されるのは、NCI の否定力ではなく Neg の否定力であると結論付けている。そして、その結果として、「だれも／なにも」を始めとする NCI は本来否定力を持ち LF においてもその否定力を持ち続けると主張している。

3.2. Watanabe 分析からの予測

しかしながら、Watanabe (2004) の省略表現の分析の下では、以下に見るよりに間違った予測がなされる。

まず、「なにも」という省略返答表現が適切に使用可能であるためには、その先行表現が否定力を持った述部であってはならないという結果になる。従って、NCI を含まない否定疑問文に対する返答としては、この省略返答表現が使用不可能という予測が得られ、例えば (36) においてはこの省略返答が不可能であると予測される。

にも」の LF 移動に付随して「なにも」の否定素性はそのコピーを途中経過地点（つまり Neg）に残す。その結果 Neg に残された否定素性のコピーが、元々ある Neg の否定素性と相殺しあって肯定と等価になると主張する。従って、Watanabe 分析では意味解釈レベルではなく「LF での否定素性の照合を通じての否定力消去」が不可欠で、その結果、先行表現の肯定述部と意味的に等価になるとする。その詳細は Watanabe (2004: 4.1, 4.4) を参照されたい。

10) この例に基づいて Watanabe は、否定環境で全称否定を導く不定表現が否定力のない全称量化表現だとする分析は不適切であると主張する。Watanabe は Giannakidou (2000) のギリシャ語不定表現の分析に言及しているが、本研究の主張は Giannakidou (2000) と同じ方向性を持つと言える。

(36) Q: なにか見なかった? A: なにも [見なかった].

この場合、Qの「なにか」はNCIではなく、述部の否定辞の否定素性は消去されないままLFで残るので、先行表現となるこのQの「見なかった」はLFにおいても否定力を持つ。ところが、Aの省略部「見なかった」は、Watanabe (2004)によれば、NCIである「なにも」が存在するゆえに、LFでは否定素性が消去され否定力を持たないはずである。従って、Qの「見なかった」とAの「見なかった」とは意味的に等価ではなく、Aの「見なかった」がPFで消去されることが不可能になり、省略返答表現として意図した解釈での使用が不適格であることを予測してしまう。しかしながら、その予測に反して、事実としては、これも完璧な省略返答表現である¹¹⁾。

更に、(37)のような談話文脈における省略表現は、Watanabe分析にとってはより深刻な問題になるはずである。

(37) A: だれも来なかった. B: 花子も. (「花子も来なかった。」の意味で.)

(37A)は、Watanabeによれば、NCIを含んでいるので、述部Negの否定素性はLFで消去され否定力を持たないはずである。従って、否定力のない先行述部と意味的等価であるためには、省略表現BのLFは以下のようにないなければならないはずである。

(38) A: だれも_i [x_i 来なかった] B: 花子も_i [x_i 来た]

従って、Bの省略表現は、「花子も来た」という肯定解釈だけが可能で、「花子も来なかった」という否定解釈は不可能であると予測される。しかし、この場合もやはり事実は異なっており、否定解釈だけが成立可能である¹²⁾。

11) ただし、この場合の意味的等価性は、(i)と同様、mi-とmi-nakに成立するとも考えられ、そう捉えれば、Watanabe (2004)分析でも問題は生じない。(傍土元氏の指摘による、2006年5月私信)

(i) John did not [_{VP} go], but Mary did [_{VP}].

12) (37)及びその議論を提示してくださったのは傍土元氏と深谷晃彦氏である(2006年5月私信)。

このように、Watanabe 分析の下では間違っただ予測を生み、その意味においても Watanabe の仮説 (31) は反証されたことになる。この省略についての議論がその主な根拠であるので、Watanabe の仮説を保持する理由はないと結論づける¹³⁾。

3.3. 省略表現についての説明

では、(32) の省略表現は、何故その意図された解釈でのみ可能なのであろうか。この節では、現時点での分析案を提示しておきたい。

(32) Q: なにを見たの? A: なにも。(=なにも見なかった。)

(32A) が適切に解釈されるためには、どのような派生を経るにしても、LF は以下のようにしていなければならないはずである¹⁴⁾。

(39) (32A) の LF: [なにも_i [t_i 見なかった]]

ところが、(32Q) には、省略部の先行表現となり得るような LF の対応物 (以下 LF objects と呼ぶ) が存在しないのであるから、純粋に LF objects 同士の平行性に基づき、いわゆる浅い照応 (surface-anaphora) による分析では説明でき

13) Watanabe は、更なる証拠として作用域解釈にも言及している。不定表現と QP の構造関係が Neg とその QP の作用域関係を反映するという Sohn (1995) の指摘を引用して、(i) を挙げている。

(i) a. [多くの学生]_{OP1}-が だれも 信用しなかった。(many>not)
b. だれも [多くの学生]_{OP1}-が 信用しなかった。(not>many)

(Watanabe 2004: (44a, b))

この事実に基づき Sohn (1995) は不定表現が LF で Neg の指定部位置にあることを条件付けるが、Watanabe は、不定表現が NCI として LF で否定力を持つとすれば NCI の LF での位置が Neg の作用域を決めるので、Sohn (1995) の条件は不要であると主張する。しかし、この観察は、それが事実であるとしても、不定表現が全称量力を持ち全称否定を導くためには Neg を c-統御しなければならないとする本研究の分析でも説明できる。また、かき混ぜ構文である (i-b) では QP と不定表現の作用域関係は多義的であると観察され、それらも考慮に入れて議論すべきである。QP と不定表現の作用域関係の観察及びその分析については片岡 (2004a, 2006: 6.1.3.2) も参照されたい。

14) Watanabe (2004) は、省略は PF での消去であり LF は完全な形で表示されるとするが、省略部の LF 表示は本来存在せず、先行表現の LF をコピーしたり、或いは何らかの先行表現を基に LF を構築するという分析も可能である。本稿ではどちらを採るべきかの議論はせず、またどちらを採っても影響はないと思われるが、便宜上後者を取り、「LF が復元される」という表現を用いる。

ないことになる。一方、完全に文脈に依存する語用論的分析でも説明は不可能である。次の例のように、先行表現が全くない状況では、「だれも」という省略表現は使用不可能だからである。

- (40) 状況1：山田教授は、どんなに少なくともせめて五人くらいの学生は、自分の補講授業に出席してくれるだろうと期待していた。ところが、当日、教室に行ってみると、一人も出席者がいなかった。教室を見ながら、言った。

山田教授：*だれも。（「だれもいない」の意味で。）

従って、先行表現が省略に必要な何かを何らかの形で導入し、それに基づいてLFが復元されると仮定せざるを得ない。本研究では、省略は、LFではなく意味表示レベル（Semantic Representation (SR)）の対応物（以下SR objectsと呼ぶ）間において成立する意味的平行性に基づいて可能になるという分析を提案したい。

Rooth (1985) や Merchant (2001) 等、広く一般に受け入れられているように、wh要素や英語のalso等の表現は、意味レベルにおいて代替命題（alternative proposition）を導入する表現であると言われている（これはKuroda (1965) がshadow sentenceと呼ぶものに相当する）。例えば、(32Q)の疑問文に対しては、以下のような前提（presupposition）に基づいて代替命題が導入され、更にそれに基づいて答えの候補となる文のリストが作られると考えられている（Kuroda 1965: Chapter I）。

- (41) (32Q)の前提： $\exists x$ (you saw x)

しかし、ここで注意すべきことは、(32A)の省略返答表現「だれも」が意図するのは全称否定解釈であり、(42)に示すような、この前提を否定する命題であるという点である。これは、いわゆるメタ否定（metalinguistic negation）と呼ばれHorn (1985) 等が論じているものである。(36A)も、疑問文である(36Q)に同様の前提があるとすれば同様に捉えられる。

(42) (32Q) の前提の否定: $\neg \exists x (\text{you saw } x) = \forall x \neg (\text{you saw } x)$

つまり, wh 疑問文では, 前提命題に加えて前提命題の否定もその返答の候補になりうると考えられる¹⁵⁾. このような考察に基づき, wh 要素が導入する前提命題のみならず, その否定命題も同様に, それらの意味表示における SR objects が省略返答文を可能にする先行要素になりうると考える. ただし, それら先行要素と省略表現の SR objects 間における意味的平行性が必要で, それに基づき省略部分の LF が復元されると提案する¹⁶⁾.

そのように仮定すると, (32) 及び (36) の省略返答表現は, 前提命題の否定の SR objects に基づいてその LF が復元されることで, 省略表現が可能になっていることになる¹⁷⁾.

15) 少なくとも日本語ではこのように考えるべきである. しかし, 田窪行則氏 (2006 年 5 月私信) によると, 例えば中国語等言語によっては, wh 疑問文における前提が異なるようである.

16) 疑問文への省略返答の分析において, 疑問文である故に導入される前提を考慮に入れるべきだという分析の方向性を示唆してくださったのは, 上山あゆみ氏である (2006 年 5 月私信).

17) ただし, 省略表現「なにも」が, なぜ全称否定解釈のみ可能で全称肯定解釈は不可能かという問いには, 「だれも／なにも」が LF で Neg を要求する要素だと言わざるを得ない. 否定を要求しない「どれも」の場合, (i) のように肯定・否定の両解釈が可能で, 違いは韻律にも反映される.

(i) Q: どれが好き? A: どれも. (=どれも好き／どれも好きでない)

つまり, wh 疑問文では肯定述部と否定述部それぞれに対応する代替命題の SR objects が存在するので, 省略返答に復元される LF の選択肢として肯定述部と否定述部の各 LF が可能であることになる. 従って「だれも」「なにも」にも肯定述部の LF そのものは (ii-a, ii-b) のように復元可能であるが, 復元されても Neg が存在しないので LF で条件で排除されるのである.

(ii) a. Q: 何が好き? A: なにも_i [t_i 好き]
 b. Q: だれが来た? A: だれも_i [t_i 来た]

英語の場合も, (iii-B) が排除されるのは, 省略における先行表現の有無の要因ではなく, Merchant (2004: 3.3.1) が主張するように NPI の LF における Neg-c-統御条件によるものである. (iv-b) のように, NPI の any(-) は, そもそも Neg に c-統御されない主語位置には生起できないのである.

(iii) A: Who did you invite?
 B: *Anybody. (Intended meaning: I did not invite anybody.)

(iv) a. 誰も メアリーを ほめなかった.
 b. *Anyone did not praise Mary.

(36) Q: なにか見なかったの? A: なにも [見なかった].

一方, (35A) は, (41) の前提の SR objects に基づいて LF が復元される. この場合「へびを見なかった」の復元を可能にする SR objects は存在せず, その否定解釈にはなり得ないのである.

(35) Q: なにを見たの? A: へび. (Watanabe 2004: (19))

次に (37) についてである.

(37) A: だれも来なかった. B: 花子も. (「花子も来なかった。」の意味で.)

この場合は, 導入される前提命題は, (43b) になるが, それは, (37A) の断定 (assertion) に基づいて「モ」により導入される. (演算子に続く部分は制限部であり, $x \in A$ は「 x は, 当該の文脈で想定される人物の集合 (A) のメンバーであること」を示す.)

(43) a. (37A) の断定: $\forall x. x \in A$ (x did not come)

b. (37B) の前提: $\exists x. x \in A$, and $x \neq \text{Hanako}$ (x did not come)

ここでも同様に, (37B) が, その LF 復元のために (43b) の SR objects を先行要素として取ると仮定すれば, (37B) の LF は, (44a) にはなり得ても, (44b) にはなり得ないはずである. 従って, (37B) が肯定解釈にはなり得ないことが正しく予測される.

(44) a. LF 1: 花子も_i [x_i 来なかった]

b. LF 2: 花子も_i [x_i 来た]

以上のように考えることで, 省略についての現象は説明可能である.

以下に提案する分析をまとめる. ここで鍵となる前提という概念は, Kuroda (1965) の前提に対する考え方に基づいていることを再度述べておく (Kuroda (1965: Chapter I, III)).

(45) 前提, 代替命題, SR objects :

前提導入表現が意味解釈レベルにおいてそれぞれ導入する前提の SR objects に基づいて、それと意味的平行性を満たす代替命題が導入される。

- a. wh 疑問文が、その疑問文への返答の候補として導入する代替命題は、(i) その前提命題と、(ii) その前提の否定命題（メタ否定による命題）の二つに基づく。
- b. 非疑問文での「モ」などの表現の場合は、その前提となる命題の SR objects に基づき、意味的平行性を満たす命題が代替命題として導入される。非疑問文の場合は、その前提の否定命題は導入されない。

(46) 省略における必要条件：

前提導入表現に関わる文脈で発せられる省略表現が、意図された解釈のもとでの可能な省略表現となるためには、その前提として導入された命題の SR objects を先行表現として取らなければならない。先行表現と省略表現の SR objects 間の意味的平行性が満たされるべく、その省略表現の LF が復元される。

上で論じてきたように、(46) の結果として、SR objects として存在しないものは省略のための先行表現にはなり得ない。従って、存在しない SR objects と意味的に等価な objects に基づく LF は復元し得ないことになり、そのような LF を持つと考えられる省略表現は不可能であるという予測が得られる。

なお、付け加えておくと、SR objects に言及するこの分析は、LF における構造上の同一性（structural isomorphism condition, Merchant (2001: Chapter 1)）だけでは不十分で、意味レベルにおける同一性（identity of meaning, *ibid.*）がまず必要だとする Merchant (2001) の分析と同じ方向性を持つ分析であると言える。

また、註 14 でも述べたように、本稿では、省略表現が使用可能であるためには、その解釈に対応する適格な LF 表示が先行表現に基づいて構築・復元されなければならないとしているが、省略表現の派生過程についての議論は行わず未決定である。ただ、省略表現が可能になるためには、その意図された解釈に対応する LF の存在が必要であるという捉え方は、Kuroda (1965) によれば、

Chomsky の the general condition that only recoverable deletion is permitted に従うものである (Kuroda (1965: Chapter I, p.18)).

省略表現の分析については、さらなる議論が必要ではあるが、この節においては、Watanabe (2004) が、その NCI についての仮説の根拠として提示している省略表現の分析が、省略現象について間違っただけの予測を生むこと、そして、それらのデータが別の分析でも説明可能であることを示し、Watanabe の仮説の根拠にはならないことを確認した。従って、NCI についての仮説 (31) に基づいて提示している焦点形態素の通言語的分析も根本的に見直すべきであることを示唆しておく。

4. 不定表現 wh-mo の統語的必要条件

本節では、第2節で見た XP-sika と「だれも／なにも」が同節内に共起した場合の現象を説明するためには、「だれも／なにも」を全称量化を導く要素と仮定すべきであることを示す。第1節の導入でも述べたが、「だれも／なにも」は格標示された項名詞句と共起可能であり、「だれも／なにも」を含む句全体を項名詞句として扱う (Kawashima & Kitahara (1992), Kato (2002) を参照のこと)。以下、その名詞句全体を示す場合は wh-mo と表す。そして、(47) のように分析すべきであることを主張する。

- (47) wh-mo は、
- a. 全称量化力を持つ。
 - b. a であるゆえに、全称否定解釈を導くためには LF で Neg を c-統御しなければならない。

4.1. wh-mo と XP-sika

ここで「だれも／なにも」が XP-sika と共起したさらなる例を挙げる。すでに述べたように、「だれも／なにも」は格標示された項名詞句と共起可能で、(48) と (49) は、(8a, b) と同じ現象を示している¹⁸⁾。

18) (8) 及びこの後の (48), (49), (58), (59) について、「文法性及び解釈の両面において判断が非常に微妙である」と査読の先生より報告を受けた。ただ、筆者と判断が一

- (48) a. *この会社の人しか [税務署員をだれも] 恐れない (こと)
 b. [この会社の人がだれも] 税務署員しか 恐れない (こと)
- (49) a. *この遊びしか [喜びをなにも] 太郎に与えてくれない (こと)
 b. [遊びがなにも] 太郎にしか 喜びを与えない (こと)

(48b), (49b) はそれぞれ (50a), (50b) のように解釈されることが可能である。しかしながら, (48a), (49a) は (51a), (51b) のように解釈できたとしても「だれも」「なにも」を適格に解釈することが不可能である。

- (50) a. (48b) : すべてのこの会社の人について, 「税務署員を恐れ, 且つ, 税務署員以外のものは恐れない」ということが成り立つ。
 b. (49b) : すべての遊びについて, 「それが, 太郎に喜びを与え, 且つ, 太郎以外の人には喜びを与えない」ということが成り立つ。
- (51) a. この会社の人が税務署員を恐れ, 且つこの会社の人以外は税務署員を恐れない。

致する人もいることを付け加えた上で, 判断には個人差が見られるのではとの指摘である。これらを含む本研究のために用意したデータはすべて, 複数の現象及びそれを説明する個々の仮説を明示的に示した上で, それらの現象の相互作用の予測を出し, その相互作用による相関が予測通りか否かを検証することで, 仮説そのものを検証するためのものである。各現象が個別の特徴を持ち, 更にそれを複数組み合わせることは日常ほとんどない。特に作用域解釈や束縛変項解釈等は, 個々人の言語能力がそれを可能にする状態になっていても, それを行うことは稀である。従って, それらを複数組み合わせた文 (重要なデータである (8), (48), (49), (58), (59) 等) の解釈の容認可能性判断には, 多少の判断の揺れが現れるのは避けられないが, 重要であるのは, 個人の中で, その問題になる相関が一貫して出るか否かである。本稿で用いた現象での判断の揺れを引き起こす要因については Ueyama (1998: 3.1), Hoji (2003: 3, 2006: 4) 等で詳しく論じているので参照されたい。ただし, Hoji (2006: 3) が詳細に論じているように, 容認可能性判断の揺れと一言に言っても, その理論から原理的には可能と期待される現象 (例えば (59b)) における判断の揺れと, その理論から不可能と予測される現象 ((59a)) における判断の揺れは, 重要度において大きく異なる。前者は提示した言語内必要条件 (つまり LF の条件) が満たされていても言語外要因が 100% 排除できない以上予想され得るもので, それだけでは提示する言語内理論を修正する決定的理由にはならない。しかし後者は, その理論にとっては致命的で, その要因の検討が不可欠である。その仮説が言語内必要条件で書かれている以上, その言語内必要条件が満たされなければ言語外条件をどう調整しても容認可能になるはずがないからである。従って提示した理論を構成する仮説のいずれかが反証されたらと見なすべきで, その理論を検討修正する必要がある。査読の先生が報告された揺れは「文法性及び解釈の両面において判断が非常に微妙である」という表現から判断して, 前者の揺れと考えられる。文の容認可能性判断と仮説の反証可能性については, 片岡 (2006: 3.6) も参照されたい。

- b. この遊びが太郎に喜びを与え、且つこの遊び以外は太郎に喜びを与えない。

つまり「だれも／なにも」を含む名詞句全体を一つの名詞句として扱い、その名詞句全体 (wh-mo) が QR するとしても、「だれも／なにも」の場合と同じ (52) の一般化が得られる。

- (52) QR 前の位置関係が, wh-mo>>XP-sika は可能であるが, XP-sika>>wh-mo は不可能である。

(15) で示した SRP が働いているので, LF での可能・不可能な関係は以下になる。

- (53) a. *XP-sika>>wh-mo
b. ^{ok} wh-mo>>XP-sika

4.2. 提案

ここで, wh-mo について (47) を仮定すると, 上で見た一般化が説明される。

- (47) wh-mo は,
a. 全称量化力を持つ。
b. a であるゆえに, 全称否定解釈を導くためには LF で Neg を c-統御しなければならない。

この wh-mo の必要条件と, XP-sika の必要条件 (26) 及び (15) の SRP を併せると, XP-sika と wh-mo が同節内に共起した場合, それら三つの条件が満たされているか否かで, 以下の LF が可能・不可能という結果が得られる。

- (54) a. *_{[NegP XP-sika₁ [_{Neg'} [_{VP} wh-mo₂ [_{VP} t₁ [_{V'} t₂ V]]]-nai]]}
b. ^{ok} [_{wh-mo₁} [_{NegP} XP-sika₂ [_{Neg'} [_{VP} t₁ [_{V'} t₂ V]]]-nai]]]

QR 前の関係が XP-sika>>wh-mo である場合, XP-sika の条件と SRP が満たされるためには LF は (54a) になる。ところが, この場合には, wh-mo は必ず

Negにc-統御されるので全称否定を導けない。一方、QR前の関係がwh-mo>>XP-sikaであれば、(54b)のように、XP-sikaの必要条件もSRPも満たされたとえてwh-moがNegをc-統御するので全称否定解釈が可能になる。このように、事実が正しく予測できる。

2.2節の(24)に示したように、QR前の位置においてXP-sikaにc-統御される名詞句は、LFにおいて、決してNegのc-統御領域外に出ることはなく、必ずNegにc-統御されることになる。QR前の関係がXP-sika>>wh-moであることが不可能であるという現象は、wh-moはLFでNegにc-統御されてはならないことを示しているのである。不定表現であるwh-moがNegと組み合わせさせて全称否定解釈を導くためには、意味表示が以下のいずれかに相当するものでなければならない。Pは任意の命題とする。

- (55) a. $\neg\exists x P(x)$
 b. $\forall x \neg P(x)$

つまり、存在量化要素が否定の作用域に存在するか、全称量化要素が否定をその作用域に取るかのいずれかでなければならない。ここで、意味表示がLFでの関係を反映すると仮定すると、wh-moがLFでNegにc-統御されてはならないのであれば、意味表示は(55a)に相当するものではあり得ない。従って、wh-moは、(55b)のように、LFでNegをc-統御する全称量化表現でなければならないのである。

4.3. 分析からの更なる結果：かき混ぜ文におけるXP-sikaとwh-mo

最後に、「目的語-主語-動詞」の語順を持つかき混ぜ構文(scrambling construction)においても、XP-sikaとwh-moが共起した場合、(52)で示したのと同じ事実が観察され、同様の議論が成り立つことを見て、本研究の分析を支持する証拠の一つとする。

- (52) QR前の位置関係が、wh-mo>>XP-sikaは可能であるが、XP-sika>>wh-moは不可能である。

日本語のかき混ぜ構文では、主語と目的語のLFでのc-統御関係が二種類可能と仮定されてきている (Saito (1992), Ueyama (1998), Miyagawa (2001) 等). LFで主語 >> 目的語である A'-scrambling と、LFで目的語 >> 主語である A-scrambling で、両者は束縛変項照応 (bound variable anaphora (BVA)) 解釈などを用いて識別可能である (Yoshimura (1992), Ueyama (1998)).

まず、非かき混ぜ文では、(56) のように、主語名詞句がQPである場合はBVA解釈が成立するが、QPが目的語である場合は成立しない。

- (56) a. [半数以上の子供]_iが [そいつ_iの先生]_jに 挨拶しない (こと)
 ^{ok} BVA
 b. [そいつ_iの先生]_jが [半数以上の子供]_iを 大事にしない (こと)
 *BVA

BVA解釈成立のためには、QPがLF移動前の位置において依存語をc-統御していなければならないか (Reinhart (1983)), 或いはQPのLF移動後の痕跡が依存語をc-統御しなければならない (Ueyama (1998), Hoji (2003)). 上で述べたように、非かき混ぜ文における主語と目的語のc-統御関係は、主語 >> 目的語だけが可能であるので、(56) はそれらの仮定から予測される通りである。

ところが、かき混ぜ文では、次のいずれの場合もBVA解釈が成立可能である。

- (57) a. [そいつ_iの先生]_jに [半数以上の子供]_iが 挨拶しない (こと)
 ^{ok} BVA
 b. [半数以上の子供]_iを [そいつ_iの先生]_jが 大事にしない (こと)
 ^{ok} BVA

(57a) では、表層の語順関係とは異なる主語 >> 目的語であるLF表示に基づいて解釈されることでBVA解釈が成立し、一方、(57b) では、表層の語順関係が反映された目的語 >> 主語であるLF表示に基づいて解釈されることでBVA解釈が成立すると考えるべきである。この事実から、かき混ぜ文には、主語 >> 目的語であるLFと、目的語 >> 主語であるLFの二種類のLF表示が可能であると考えられてきた。逆の見方をすれば、(57a) でBVA解釈を成立させた場合、こ

の文は主語 >> 目的語である LF 表示を持つ A'-scrambling 文として解釈されていることになり、(57b) で BVA 解釈を成立させた場合には、この文は目的語 >> 主語である LF 表示を持つ A-scrambling 文として解釈されていることになる。

さて、かき混ぜ文の主語、目的語として wh-mo と XP-sika が共起すると、主語と目的語の構造関係が異なる LF が二種類可能であるので、wh-mo>>XP-sika と XP-sika>>wh-mo の両方の構造関係が常に可能であることになる。従って、wh-mo>>XP-sika の構造関係を持つ LF が可能である以上、それらの文は容認可能になることが期待される。事実はその通りである。

- (58) a. 優秀な子供にしかこの学校の先生がだれも 褒美をあげない (こと)
 b. 優秀な子供にだれも この学校の先生しか 褒美をあげない (こと)

ところが、BVA を組み込んで XP-sika>>wh-mo の構造関係で解釈されることを強要すると、その文は予測される通り容認不可能になる¹⁹⁾。一方、BVA によって wh-mo>>XP-sika の構造関係を強要されても、その文はやはり容認可能のままである。

- (59) a. *[優秀な子供にしか]_i そいつ_jの先生がだれも 褒美をあげない (こと)
 with BVA, XP-sika>>wh-mo
 b. [優秀な子供にだれも]_i そいつ_jの先生しか 褒美をあげない (こと)
 with BVA, wh-mo>>XP-sika

これらかき混ぜ文における事実も、同節内に XP-sika と wh-mo が共起した場合、QR 前の関係が wh-mo>>XP-sika である文は容認可能であるが、XP-sika>>wh-mo の文は容認不可能であることを示している。同じ観察は再述要素 (resumption) を用いても示されることを片岡 (2006: 6.2.2) で論じているが、

19) ここで重要なのは、(i) で BVA 解釈が容認可能な話者が (59a) は不可能であるという点である。

(i) [優秀な子供にしか]_i そいつ_jの先生が 褒美をあげない (こと)

この事実は本研究の分析でなければ説明できないものである。また、このかき混ぜ文における議論は、(8)、(48)、(49)それぞれに対応するかき混ぜ文においても成り立つものであることを付け加えておく。

5. 結語

以上の議論に基づいて、日本語の不定表現「だれも／なにも」は、全称量化を導く要素であり、それゆえに全称否定解釈を導くためにはそれを含む名詞句全体(本研究ではwh-moで表している)がLFにおいてNegをc-統御しなければならないことを主張する。「だれも／なにも」をNPIの一つとして扱いLFでの派生においてNegにc-統御されることを必要とする、という一般に受け入れられている仮定(Kato (1994, 2002) 等)、及び、「だれも／なにも」をNCIとしてそれ自体否定力を持つとするWatanabe (2004)の分析は、経験的に不適切であり、それらの分析は維持されるものとは言えない。

また、片岡(2006: 3.4)で論じたように、かき混ぜ文が、目的語>>主語であるLF表示を持つA-scrambling文として解釈される場合、その目的語はLFでNegにc-統御されることはない。片岡(2006: 6.1)では、wh-moがそのA-scrambling文の目的語として生起できることを示しているが、その事実も本研究での結論と合致するものである。

この論文の結びにかえて、今後の課題として残された問題について述べておきたい。本稿の議論に基づけば、wh-moは全称量化を導く表現であるという結論に至り、またそれ故に、全称否定解釈を導くためにはLFにおいてNegをc-統御しなければならないと主張したが、では何故、wh-moが常にNegを要求するのかという問いには答えていない。また、Negをそのc-統御領域に要求すると言っても、Negとの関係でどの程度の局所性が必要とされるのかについても、まだ検討すべきであると考えられる。wh-moとNegの関係付けは節境界を越えるものではないと一般には見なされているが²⁰⁾、(60)に示すように、節境界を越える

20) wh-moは節境界を越えてNegと関係付けられることがないというのが一般の意見の一致するところである。例えばKato (1994)では以下の例を挙げている。

(i) * 目撃者は[食事の前にだれも部屋を出た]と言わなかった。(Kato 1994: 28b)

と判断できる場合と、明らかに超えられない場合があるからである。

- (60) a. *だれも新聞を読めば, 山田先生が喜ばない.
 b. *[新聞を読まない] 学生が何も発言した.
 c. ?[授業中に何も言う] 学生がいない (理由)
 d. ?? 山田先生が [学生がだれも新聞を読む] と思わない (理由)

これらの例がどのように説明されるか、また、その他の wh-mo の特質については、「どの～も」等との関係も含めて、今後検討していく必要がある。

また、もう一点、今後の課題として、「だれも／なにも」を含む発話の意味解釈を考える際に考慮すべき重要な要因を述べておきたい。最近、韻律と作用域解釈の関連性が Kitagawa (2005) などで論じられ、本稿で扱った「だれも／なにも」を含む不定表現についても、Kuroda (2005) や郡司 (2006) で論じられている。韻律の違いは特に関東方言において顕著に現れ、意味解釈との対応が確認されている。査読の先生からもご指摘頂いたが、韻律における違いが文の容認可能性判断にどのように影響し、また本研究の統語的分析とどのように関連するかを調べていくのは、必要不可欠であると思われるが、現時点では今後の課題とせざるを得ない。

最後に、本稿の議論において重要な鍵となった XP-sika の統語的条件 (26) に関して、付け加えておきたい。(26) の条件は、XP-sika と Neg との LF での位置関係についての条件の提示である。一般に仮定されているような素性の一致に基づいた主要部・指定部の関係の存在を主張するものではない。何らかの素性一致の動機付け無しに主要部・指定部という関係に言及することには理論的な問題が残るとは思うが、現時点では何らかの素性の一致を仮定すべきであるかどうかの議論は行っておらず、事実に基づく Neg と XP-sika の LF における関係が主要部・指定部の位置関係と同じ関係にあるという主張である。ただ、日本語では一致が義務的ではないという見方に従えば (Kuroda (1988), Fukui (1995) 等),

Kato (1994) は、英語等では上位節の Neg によって否定性を与えられた補文標識が従属節内の「だれも」を認可することが可能であるとされるが (Laka (1990) 等)、日本語ではそれが不可能であると主張する。wh-mo の分布のさらなる詳細については、片岡 (2006: 6.1.2) を参照されたい。

XP-sika と Neg の関係は必ずしも何らかの素性一致に基づいた位置関係である必要はないと考える。その点も考慮に入れた上で、XP-sika は主題 (Subject) として Neg を主要部とする否定述部 (Predicate) を補部として取り、叙述文 (Subject-Predication) として解釈されるという分析を考えている。これについては、日本語の個別言語としての特徴そのものと関わる問題でもあり、本稿の目的をはるかに超えるものである。興味深い問題ではあるが、今後の重要な研究課題の一つとしておきたい (詳細は、片岡 (2006: 5.1.4) を参照されたい)。

参 照 文 献

- Aoyagi, Hiroshi and Toru Ishii (1994) On NPI licensing in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 4: 295–311. Stanford: CSLI.
- Bosque, Ignacio (1980) *Sobre la negación (On the negation)*. Madrid: Ediciones Cátedra, S. A.
- Chung, Daeho and Hong-Keun Park (1998) NPIs outside of negation scope. *Japanese/Korean Linguistics* 6: 415–435. Stanford: CSLI.
- Giannakidou, Anastasia (2000) Negative ... concord? *Natural Language & Linguistic Theory* 18: 457–523.
- Fukui, Naoki. (1995) *Theory of projection in syntax*. Stanford: CSLI/Tokyo: Kurosio Publishers.
- Haegeman, Liliane (1995) *The syntax of negation*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Haegeman, Liliane and Raffaella Zanuttini (1996) Negative concord in West Flemish. In: Adriana Belletti and Luigi Rizzi (eds.) *Parameters and functional heads*, 117–179. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Hayashishita, J.-R. (2004) Syntactic scope and non-syntactic scope. Unpublished doctoral dissertation, University of Southern California.
- Hoji, Hajime (1985) Logical form constraints and configurational structures in Jap-

- anese. Unpublished doctoral dissertation, University of Washington.
- Hoji, Hajime (2003) Falsifiability and repeatability in generative grammar: a case study of anaphora and scope dependency in Japanese. *Lingua* 113: 377–446.
- Hoji, Hajime (2006) Assessing competing analyses: Two hypotheses about ‘scrambling’ in Japanese. *Theoretical and empirical studies of reference and anaphora—Toward the establishment of generative grammar as an empirical science*. 139–185. Granted by grant-in-aid for scientific research (B), Japan Society for the Promotion of Science. Grant No. 15320052.
- Horn, Laurence R. (1985) Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity. *Language* 61: 121–174.
- Huang, C.-T. James (1982) Logical relations in Chinese and the theory of grammar. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- 今仁生美 (1993) 「否定量化文を前件に持つ条件文について」益岡隆志 (編)『日本語の条件表現』: 203–222. 東京: くろしお出版.
- 片岡喜代子 (2004a) 「日本語否定文の構造: かき混ぜ文と否定呼応表現」博士論文, 九州大学.
- 片岡喜代子 (2004b) 「否定要素を c- 統御する否定呼応表現」*Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting (KLS 24)*: 1–11. 関西言語学会.
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造: かき混ぜ文と否定呼応表現』東京: くろしお出版.
- Kataoka, Kiyoko. (2006) ‘Neg-sensitive’ elements, Neg-c-command, and scrambling in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 14: 221–233. Stanford: CSLI.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative sentences in Japanese*. Sophia Linguistica Monograph 19. Tokyo: Sophia University.
- Kato, Yasuhiko (1994) Negative polarity and movement. *MIT Working Papers in Linguistics* 24 (Formal Approaches to Japanese Linguistics 1): 101–120.
- Kato, Yasuhiko (2002) Negation in English and Japanese: some (a)symmetries and their theoretical implications. In: Yasuhiko Kato (ed.) *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, 1–21. Tokyo: Sophia University.

- Kawashima, Ruriko and Hisatsugu Kitahara. (1992) Licensing of negative polarity items and checking theory: a comparative study of English and Japanese. *Proceedings of the Formal Linguistic Society of Midamerica* 3: 139–54.
- Kitagawa, Yoshihisa (2005) Prosody, syntax and pragmatics of wh-questions in Japanese. *English Linguistics* 22.2: 302–346.
- Klima, Edward S. (1964) Negation in English. In: Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz (eds.) *The structure of language*, 246–323. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 郡司隆男 (2006) 「日本語のNPIの韻律と意味」 *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 9: 17–30. 神戸：神戸松蔭言語科学研究所.
- Kuno, Susumu (1980) The scope of the question and negation in some verb-final languages. *Papers from the 16th Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society (CLS)* 16: 155–169.
- Kuno, Susumu and John Whitman (2004) Licensing of multiple negative polarity items. In: Young-key Kim-Renaud and John Whitman (eds.) *Studies in Korean Syntax and Semantics by Susumu Kuno*, 207–228. Seoul: International Circle of Korean Linguistics.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted in 1979 in series of *Outstanding dissertations in linguistics*. New York: Garland.
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticae Investigationes* 12: 1–47. (Reprinted in S.-Y. Kuroda (1992), *Japanese syntax and semantics*, 315–357. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.)
- Kuroda, S.-Y. (2005) Prosody and the syntax of indeterminates. In: Dorian Roehrs, Ock-Hwan Kim and Yoshihisa Kitagawa (eds.) *Syntax and beyond, Vol. 5 of Working Papers in Linguistics*, 83–116. Bloomington, Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- Laka, Itziar. (1990) Negation in syntax: On the nature of functional categories and

- projections. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- May, Robert (1985) *Logical form: Its structure and derivation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Merchant, Jason (2001) *The syntax of silence*. Oxford: Oxford University Press.
- Merchant, Jason (2004) Fragments and ellipsis. *Linguistics and Philosophy* 27: 661–738.
- Miyagawa, Shigeru (2001) The EPP, scrambling, and wh-in-situ. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in language*, 293–338. Cambridge, MA: MIT Press.
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』東京：大修館書店。
- Pollock, Jean-Yves (1989) Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20: 365–424.
- Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and semantic interpretation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Rooth, Mats (1985) Association with focus. Unpublished doctoral dissertation. University of Massachusetts, Amherst.
- Saito, Mamoru (1992) Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 69–118.
- Sells, Peter (2001a) Negative polarity licensing and interpretation. *Proceedings of ICKL* 11: 115–147. Seoul: International Circle of Korean Linguists.
- Sells, Peter (2001b) Three aspects of negation in Korean. *Journal of Linguistic Studies* 6: 1–15. Jeju Linguistics Circle.
- Sells, Peter (2006) Interactions of negative polarity items in Korean. *Harvard Studies in Korean Linguistics* 11: 724–737. Harvard University.
- Sohn, Keun-Won (1995) Negative polarity items, scope and economy. Unpublished doctoral dissertation. University of Connecticut, Storrs.
- Takahashi, Daiko (1990) Negative polarity, phrase structure, and the ECP. *English Linguistics* 7: 129–146.
- 田中大輝 (2004) 「サエのスコープ：XP-QR と X⁰-QR」『九州大学言語学論集』

第 24 号 : 67–88. 福岡 : 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室.

- Tomioka, Satoshi (to appear) Pragmatics of LF-intervention effects: Japanese and Korean Wh-interrogatives. To appear in *Journal of Pragmatics*.
- Ueyama, Ayumi (1998) Two types of dependency. Doctoral dissertation, University of Southern California. Distributed by GSIL Publications, USC, Los Angeles.
- Watanabe, Akira (2002) Feature checking and Neg-Factorization in negative concord. In: Yasuhiko Kato (ed.) *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, 51–77. Tokyo: Sophia University.
- Watanabe, Akira (2004) The genesis of negative concord: syntax and morphology of negative doubling. *Linguistic Inquiry* 35: 559–612.
- Yoshimura, Noriko (1992) Scrambling and anaphora in Japanese. Unpublished doctoral dissertation, University of Southern California.
- Zanuttini, Raffaella (1991) Syntactic properties of sentential negation. A comparative study of romance languages. Unpublished doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- Zagona, Karen (2002) *The syntax of Spanish*. Cambridge: Cambridge University Press.

《要旨》

日本語で文否定要素 (Neg) を必要とする不定語+モ「だれも／なにも」は、英語の NPI の any- と同様、否定とともに全称否定解釈を導くので、any- の対応物として LF での Neg による c-統御がその必要条件と見なされてきた。また最近の Watanabe (2004) において、イタリア語等の否定環境に現れる不定語と同様にそれ自体否定力を持った要素であるという分析も提示された。本研究では、まず、同じく Neg を要求する「シカ」句とそれら不定語+モの相互作用の現象に基づき、不定語+モは、LF で Neg に c-統御されてはならないこと、また、それ自体否定力を持たないことを示し、それら先行の分析が不適切であることを示す。その上で、「シカ」句との相互作用の現象に基づいて、不定語+モを含む名詞句全体が全称量化を導く表現であり、それ故に、全称否定を導くためには LF で Neg を c-統御しなければならないことを主張する。

Abstract***Wh-mo* outside the Neg-c-command Domain**

Kiyoko KATAOKA
(Nihon University)

An indefinite expression such as *dare-mo* and *nani-mo* in Japanese requires the sentential negation (*Neg*) and gives rise to an interpretation with universal negation. In analogy to English *any-*, they have generally been treated as *Negative Polarity Items (NPIs)* and have been assumed to be in the c-command domain of *Neg* at LF, following Klima (1964).

Italian and Spanish have another kind of indefinites involving negation, e.g., *nessuno* in Italian, which is called *Negative Concord Item (NCI)*. It has a sentential negative force, but induces a single negation even when it is ‘doubled’ with *Neg*. While the canceling of negative force is assumed to induce a single negation, it has not been specified which of the two negative forces gets canceled (Haegeman and Zanuttini (1998), among others). Recently, Watanabe (2004), assuming that *dare-mo* and *nani-mo* are NCIs, has argued that the negative force of *Neg* rather than that of NCI should be canceled in ‘negative doubling’ cases, concluding that NCIs are inherently negative, on the basis of the ellipsis data involving *dare-mo/nani-mo*.

In this paper I show that *dare-mo/nani-mo* cannot be c-commanded by *Neg* at LF and that they do not have a negative force, either, based on their interactions with *XP-sika*, another *Neg*-sensitive element in Japanese, and I conclude that neither the NPI-analysis nor the NCI-analysis is appropriate. I also point out problems with Watanabe’s analysis of ellipsis, and argue that it cannot be maintained. Referring to *dare-mo/nani-mo* with or without a co-occurring case-marked N as *wh-mo*, and assuming that the entire phrase (e.g., *gakusei-ga daremo*) functions as an argument, I argue, based on how *wh-mo* interacts with *XP-sika*, that *wh-mo* has a universal force and therefore must c-command *Neg* at LF to induce universal negation.

(受領日 2006年9月7日 最終原稿受理日 2007年1月9日)